



区画整理が始まった当初（北都地区会館展示板から）

北都の由来は「大谷地の北東」

この地域は明治35年(1902)ころから開拓者が入り、幌内鉄道株主・北村英一郎が所有していたので「北村農場」といわれ、大正末期、厚別川氾濫による低湿地の原野約35万平方^{ほくと}を伊藤作一が買ってからは「伊藤農場」と言われるようになっていた。

北都団地になった地域は、これに隣接する「草刈り場」と呼ばれていた共有地と、東白石及び川下の一部を合わせた約77万平方^{ほくと}である。

この土地は昭和7年(1932)ころに水田耕作が始まり「白石村大谷地西農事組合」が設立されたが、21年(1945)

土地解放により函館本線の北側の水田農家12戸が独立し、「北斗農事組合」を名乗り、以来通称「ほくと」となった。北斗の名の由来は大谷地地区の北東部に位置していたからである。

23年(1948)、他の地区に先駆け、函館本線の北へ電気が引かれた。

用水不足と後継者難で離農、宅地化進む

30年代に入り、火山灰台地の延長にあたる地域では、上流の水田の増加に影響され、年々灌漑用水の確保が難しくなり、38年(1963)ついに水田耕作を中止しなければならなくなった。

一方、昭和25年に白石村が札幌市と合併したころから、後継者難による

離農者が出はじめ、さらに農地転用による不規則な私道と家屋の乱立が目立ち始めた。こうした状態を防ぐため、38年9月、旧伊藤農場関係者・北斗農事組合・北斗水利組合・川下地区関係者の約40人は、3割減歩負担前提の区画整理事業実施に踏み切り、39

農地転用による不規則な宅地造成を区画整理で解消した



現在の北都団地（北都公園付近）



年3月「札幌市北都土地地区画整理組合」を結成、41年までの4年間の継続事業で「北都団地」を造成した。

これは農地を住宅団地化した北海道初の事業だった。まず幅20㍍の北13条北郷通を通し、区画道路6本（延長1万2,700㍍）を造り、地番整備を行い、中心部には広い公園と小学校用地、さらに児童公園4カ所を設けた。全区画のうち道路用地は21%、公園用地は3%、総工費1億6,500万円だった。

貨物駅による南北交通遮断問題

ところが事業が完成した直後の42年12月、国鉄貨物ヤードと札幌貨物ターミナル駅建設による踏切封鎖問題が起きた。地区住民は延べ1,000人座り込みなどの強力な反対運動を展開したが、甲斐なく46年10月、サイロ型の入り口を含めて全長300㍍の長大歩道橋が設けられた。

現在この一帯は229.8㍍の流通業務地区が確保されており、北海道の物資の集散基地として重要な役割を担っている。そのうち154㍍は札幌市が分譲した大規模な大谷地流通センターで、現在はJR貨物ターミナル駅、トラックターミナル、道路貨物運送業者56社、倉庫業19社、卸売業91社、自

動車整備業組合などが事業を行っている。昭和59年には5,000平方㍍の屋内展示スペースをもつ総合見本市会場「札幌流通総合会館(アクセスサッポロ)」も建設された。

北海道の流通の中心、生活の利便も向上

平成4年には交通の大動脈である北海道横断自動車道が全面開通してこの地域を貫き、大谷地インターチェンジから流通センターに接続し、この地区はますます貨物輸送の北海道の中心になってきた。同時にマイカー利用が欠かせない市民にとっても交通網の充実が利便をもたらした。

昭和63年にはJR千歳線に無人駅の平和駅が設置された。地域の南北を鉄



都市化が進み、この一面の畑が虫食い状に宅地として分譲されてきた（北都地区会館展示板から）

道に分断されて不自由だったが、平和駅の設置によって交通が非常に便利になり、住宅地としても魅力ある地域になってきた。

なお、北都団地区画整理の由来は北都地区会館の階段室にパネル展示されている。

（塩見一釜）



昭和23年頃撮影の米軍航空写真に現在の地図を重ねたもの。この頃は一面が田んぼだった